第１７１回　番組審議会

１．日　時　　平成２０年4月9日（水）１２：００～

２．場　所　　メトロポリタン盛岡ＮＥＷ　ＷＩＮＧ　３Ｆ「星雲　東の間」

３．委　員　　委員総数　　１３名
　　出席委員数　　１０名（欠席委員数　　３名）

○出席委員（敬称略）

佐尾　玄（副委員長）
-以下５０音順-
久慈　浩介
斎藤　純
斎藤　雅博
東海林　千秋
菅原　正二
土樋　靖人
中原　祥皓
村上　幸子
八木橋　伸之

○会社側出席者（７名）

内海　幸司（代表取締役社長）
佐藤　滋樹（常務取締役）
小原　忍（常務取締役）
藤澤　利憲（常務取締役）
前田　秀男（取締役技術局長）
一戸　俊行（報道局長）
今野　賢也（報道部）

○事務局　　後藤　望

４．議　題　　『第７回ＦＮＳ春高バレーコーチングキャラバン』

～今しかないで！！行かんかい！！～

平成２０年3月2日（日）１３：５５～１４：５０放送

５．議　事　概　要

今回は『第７回ＦＮＳ春高バレーコーチングキャラバン』について審議した。

各委員からは「決勝戦で負けたことも結果的に良かったと感じるほど流れがドラマチックであった」、「コーチとチームの相性の良さが、この番組の感動を呼んでいたとも思う」、「取材陣の姿勢が、コーチはもちろん生徒たちとの信頼関係もしっかり築き、丁寧に作られていた」、「個人の成長がチームの成長に結びついていくところが明確に表現されていた」などの意見が出た。

また「叱ることの大切さを改めて感じた。先生や、指導者、子を持つ親にぜひ見てもらいたい番組だった」との意見もあった。

６．議　事

〇事　務　局

ただいまより第１７１回番組審議会を開催いたします。

今回の議題は３月２日に放送されました『第７回ＦＮＳ春高バレーコーチングキャラバン』です。本日は、プロデューサーのめんこいテレビ・一戸報道局長、ディレクターのめんこいテレビ報道部・今野賢也が出席しております。

それでは、佐尾副委員長に本日はよろしくお願いいたします。

〇佐尾副委員長

それでは、議事に入りたいと思います。初めに、一戸さんと今野さんから、今回の番組の背景などについて説明や感想をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

〇一戸プロデューサー

今回、番組のプロデューサーを担当しました報道部の一戸です。よろしくお願いします。

春高バレーコーチングキャラバンは、元全日本の選手がおよそ半年間にわたって特別コーチとして派遣されるものです。高校の選定は公募の中から、高体連の方や、コーチ、そして

めんこいテレビのプロデューサー、ディレクターが話し合って決めています。今回は、応募が盛岡二高だけでしたので、悩むことなく盛岡二高に決まりました。

私は、この番組のプロデューサーを担当して４回目になります。過去３回は、盛岡一高の男子、盛岡市立高校の女子、花巻東高校の男子でした。３校とも県大会の決勝戦で敗れまして、その後すべての高校がインターハイに出場しています。今回こそは、と思いましたが、３度あることは４度ありまして、残念なことにまた決勝で敗れました。

大谷コーチは、お会いして話してみると、本当にどこにでもいる「大阪のおばちゃん」といった感じです。ただ、バレーボールへの熱意と、子供たちを成長させたいとの気持ちがとても強い方でした。本人も番組の中で先生になりたかったと話していました。番組ではそんなコーチの厳しさと優しさが出ればいいなと考えていました。

今回は、水沢業務センターの今野がディレクターとして担当しました。普段は、一人でカメラを担ぎ、原稿書いてという毎日です。彼の企画はいつも何か温かいものがあるので、機会があれば番組を作って欲しいと考えていました。今回初めてのディレクター経験でしたが、コーチのキャラクターにも助けられながら、７カ月の取材を一生懸命やったなと思っています。

今日は皆さんからご意見をいただき、今後の番組づくりに活かしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

〇佐尾副委員長

では、今野さん、お願いします。

〇今野ディレクター

今回、ディレクターを務めました報道部の今野と申します。よろしくお願いします。

ディレクターを指名されたときには戸惑いがありました。それは自分が高校生のときに一生懸命スポーツに打ち込んだ経験もなく、ルールから勉強しなければならないほど、バレーボールを分からなかったからです。それでも最初の取材で大谷コーチにお会いしたとき、あいさつの仕方だとか、話を聞く態度ですとか、そういったことを指導されていたので、バレーボールは詳しくないけれど、何か自分の視点での取材が出来そうだと思いました。

その後は、人間教育を徹底してやっていって、バレーボールの指導は１０月くらいからやっと始めたという感じでした。生徒たちもよくそこから厳しい練習についていったなと思っ

て取材していました。

盛岡二高はいつも上位までいく名門チームですが、今年のチームは、生徒たちの話では「私たちは期待されていないんです」とのことでした。そこで監督はレギュラーチームをまず鍛え、何とか勝てるところまでいこうと思うのですが、大谷コーチは、レギュラーチームも鍛えるけれども、ほかの選手も同じくらい手をかけてやらないとチームがまとまらないという考えで指導していました。大谷コーチは指導を何段階かに分けていたように思いました。先ず自分が一生懸命頑張ること、そしてそれができたら仲間を支えること、最後がチームで必要な存在になること、と分けているように思いました。番組はその段階を経て生徒が成長していく様子が伝わるように心がけて制作しました。

何か言われてすぐに変わったということではなくて、それが大会の時に花が開いたように感じましたので、そのように制作しました。

初めての番組制作ということで、周りに協力をいただきながら制作しましたが、今日は色々な意見をいただいて今後の番組づくりの参考にさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、委員の方からご意見を伺いたいと思います。

初めに、土樋委員にお願いいたします。

○土樋委員

この番組は、番組審議会の議題となると思い、放送日に見ました。“だめチーム”が成長して決勝まで進出、テレビ局としては筋書きどおりの流れで進んだのかなと思います。

私は、新人戦のとき観戦したのですが、あの時点では届かないボールには最初からあきらめて追いかけないようなチームでした。大谷コーチは苦労しているな、というのが見て取れました。あのチームは決勝まで行けるチームではなかったと思っていましたが、春高バレーは気持ちが表れる競技なので、やっぱり気持ちの面で非常に大きく成長した結果かなと思いました。

番組から感じたのは、礼儀とコミュニケーションの大事さということです。私もスポーツの取材を多くするのですが、練習を中断しても挨拶をするようなチームがあります。そこまで徹底していないと気持ちの緩みがプレーの緩みにつながるものかなと思いました。

今回の番組は、高校生以上に指導者が参考になる番組ではなかったかなと思います。あれだけ厳しくどなられても生徒がついていったのは、大谷さんの人間性が大きいと思います。楽しく見させていただきました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、斎藤純委員、お願いいたします。

○斎藤純委員

番組中盤あたりからボロボロ泣いて見てました。まんまと思うつぼにはまってしまったという感じがしました。最後の白熱した試合も、勝つのかなと思ったら負けて残念だったけれども、負けたほうがドラマチックになるのかなという気もしました。今野さんは取材中にあの子たちが泣いてるときにもらい泣きなどしなかったのでしょうか。

○今野ディレクター

取材中に何度ももらい泣きしましたし、会社に帰ってプレビューしているときにも一人で何度も泣いていました。

○斎藤純委員

そうですか。そういう意味で面白く拝見しました。

それから、大谷コーチは最初に会ったときは大阪弁の普通のおばさんだったとおっしゃっていました。僕もそう思っていたのですが、番組が終わるころにはすごい格好のいい、全然違う人に見えて、それも面白かったです。

これは番組からちょっと離れての話ですが、コーチが礼儀とかやる気とか指導しますよね。コーチが来る前にこのチームにはそういうことを指導する監督もコーチもいなかったのかなと思って、情けない感じがしました。多分、大谷コーチのころはスパルタというか、監督から殴れるような指導を受けていたと思うのですが、今そんなことをしたら先生とはいえ逮捕されることもあります。あんなに厳しく叱られながらも、部員が辞めませんね。あれも僕はちょっと不思議だなと思いました。だから、本当はやる気のある生徒達で、そのやる気をコーチは引き出したんだなと見ました。

近頃、上司に挨拶もしない、上司が注意をすると怒られたと家へ電話をかけるというよう

な新入社員が増えているというのを聞いています。この番組で見た高校生たちなら社会に出てもそんなことはない、どこでも通用するだろうなと思いました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、菅原委員、お願いいたします。

○菅原委員

この番組は、過去何回か皆で論議しましたが、１つ思ったのはコーチとチームの相性が合った場合に良い番組になるのかな、と今回感じました。相性が悪く、ただの意地悪としか見えないと思ったときもあったような記憶があります。今回は、最初は怖いおばさんだなと思ったら、だんだん、ほろっとくるんですよね。それで、みんなもやる気になって、ディレクターももらい泣きするぐらいですから、相性の良さが良い方向に行きましたね。

強豪盛岡女子高に勝って、あそこで全力出して切れてしまったと思います。だから、決勝では不覚を取ったと思うのですが、勝つ人もいれば負ける人もいるわけで、何も全勝すればいいというものではありません。誰しも若いころ一生懸命戦って、勝ったり、泣いたり、吼えたりした記憶があると思います。みんな一生懸命やって、それぞれに何かの肥やしになり、いいお母さんになったり、いい選手になったりとかします。ですから、その瞬間一生懸命打ち込んだ純度にすごく意味があると思います。とても気持ちよく拝見しました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、八木橋委員、お願いいたします。

○八木橋委員

私も大変面白く見させていただきました。今回は、非常に時間が短く感じられ、あっという間に終わってしまった。なぜかと考えてみましたが、１つ目には指導者の態度に絞って、それを一つ一つ丹念に拾っていたということです。２つ目には周りのうるさくなりそうな人、たとえば校長の話だとか選手の父兄の話だとかを入れなかったということ、これが非常に功を奏したのではないかなという気がします。選手達が全力プレーで何を得たかということもあっても良かったかなという気もしましたが、決勝のシーソーゲームを丹念に映していましたので、相当得るものがあったというのはおよそ想像できました。

キャプテンがどうもひとりよがりで突っ張っているときに、コーチの言葉が「おまえが変わっていかないとみんながついていかない。みんながついていくような人間になれ」と説教していましたが、あれは実際の会社でも使えるのという気がします。

それから、もう一つ感動したのは、エースが、エースを活かすか、チームの底上げをするかという問題提起をしましたが、コーチは両方やると言いました。しかも限られた時間でのすごい決断だなという気がしました。

それから、お決まりですけれども、勝つよりも気持ちを込めて全力プレーしろと教えます。医者でもそうですが、死ぬと分かっていても全力で治療しなければならない世界というのは結構あると思います。そういうことを一つ一つ教えていくというのは非常に将来役に立つだろうなという気がしました。

非常に短い期間で子供らの得たものをむしろカットしたことによって余韻が残ったのではないでしょうか。特にシーソーゲームのシーンなんか、本当に引き込まれて見てしまった。あの構成は大変良かったと思います。

今野さんはバレーのことは余り知らないと言われましたが、一般の視聴者に見せるには、むしろ知らない人が撮ったほうが分かりやすいという気がしました。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、斎藤雅博委員、お願いいたします。

○斎藤雅博委員

ついつい引き込まれて、時間を忘れ最後まで見ました。私は番組審議委員になってから３回目の同番組を見たことになりますが、今回が一番面白かったと感じております。

それにしても大谷コーチの大阪弁での指導は素晴らしく、痛快感さえ感じられました。厳しく指導するには、大阪弁がぴったりだなと感じました。７カ月にわたる取材で丹念に生徒たちの姿を追って、成長の軌跡を見事に映像化し、まさしく涙と成長の半年間だったように思います。特に今回はコーチと生徒の緊張ある関係をきちんと描いていたと思います。それで、チームが１つにまとまっていく過程を的確に捉えていたと感じました。

基本的には大半がコート上の映像だったと思います。それが非常に良かったと思います。生徒たちのスタートのころの表情と決勝戦での表情が全く違っており、人間て半年間で変わり得るものだと感じました。大谷コーチが「今しかない、自分を変えれるのは」と言いまし

たけれども、厳しい練習や試練に耐えてこそ変わっていけるものではないかと改めて思いました。

ちょっと番組から離れますが、銀行でも中途退社する人がどんどん増えてきており、何か最近の人たちは忍耐力とか耐性がどうも欠如していると感じています。恐らくこういう厳しい練習とか経験してこなかったのではないかなと推察していますが、彼女たちは決して途中であきらめるとかということもない人間に育ったのではないかなと思います。

それから、キャプテンが本気で叱ってくれる人は宝物という話をしていましたけれども、これも最近の傾向で銀行内で本気で叱る人が少なくなってきています。パワハラといった、余り厳しくすると裁判沙汰になるということも背景があろうかと思いますけれども、本気で叱ってくれる人がいないというのは、悲しいことではないかと思って見ていました。道しるべという言葉を大谷コーチは使っていましたけれども、そういった意味ではまさしく道しるべになったのではないかと思います。

人を育てるということは簡単なことではありませんが、スポーツでも学校でも恐らく社会でも共通する点が多いなと思いながら見た次第です。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、中原委員、お願いいたします。

○中原委員

私は、一般的にテレビ番組をこの番組に限らず番審という立場から見ると、面白かった、見て良かった、楽しかった、参考になった、感動した、ということに視点を置いて番組の感想を考えます。この番組に限れば参考になった、感動した、の２つでした。

私も、この前の本放送のときに見て感動しましたが、ビデオで見た２度目も感動しました。何が参考になったかというとやはり大谷コーチが発する言葉です。団体競技の難しさということを改めて痛感しましたし、社会人としての団体のありよう、組織体のありようということも十分に考えさせられて、大谷コーチの発言をメモいたしました。大谷コーチの「このボケ！」という言葉から入っていきましたが、これが最後まで印象に残り、これもまた上手いなあ、と思いました。

この番組に選ばれた高校が負けてばかりということですが、これも本当に負けて良かったという印象です。結果論ですが、負けて次に頑張ってくださいという励ましの気持ちを起こ

させてくれたということです。

なぜ彼女がこれほどまでに頑張って言えるかと、半年間だからできたと考えます。それをできる学校のシステムがないということになると、半年間のコーチの素晴らしさとかを大いに活用したら良いのではないかと思いました。

なるほど、叱る中で相手の気持ちを知る、相手の気持ちを察するということは絶対必要です。確かにこの番組からは先生方も学んで欲しいし、子を持つ親もこういうことも十分見て欲しいと思いました。

いろいろ注文つけようと思って見ていましたが、感動してしまい、それを忘れさせられてしまいました。上手くやられたなという思いが確かにありますが、そういったことを忘れさせる番組の作りだった、ということです。

私は岩手大学で、学生に社会人として基礎力をつけて社会に出すためのシステム作りを経済産業省に働きかける運動をしています。大谷コーチに大学に半年来てもらう、そういうことまで考えさせていただいた番組だったと思います。

それから、ちょっと質問させていただきます。僕はたくさん応募があって、そこから選んだのかなと思っていましたので、何で１つの学校だけの応募しかないのかということをお聞きしたい。それからこの番組はコーチの人柄が左右します。その人物を選ぶことにおいて、めんこいテレビの希望が可能なのかどうか教えてもらいたいと思います。

〇一戸プロデューサー

高体連の方が各学校に呼びかけるのですが、取材の時間制限などで沿岸地域は難しいだろうなということで応募しない高校もあるようです。去年に関してはゴールデンウイーク明けで、呼びかけが結構遅かったということもありました。コーチの人選についての希望は可能です。例えば男子コーチ希望、女子コーチ希望というのもありますし、具体的にどんな人とか書く欄もあります。ただ、どのコーチが本当に良いのか、色々と情報を取らないと分からないので、女子コーチをお願いしますとか、男子コーチをお願いしたいという程度の希望を出しています。

〇佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、村上委員、よろしくお願いいたします。

○村上委員

非常に楽しく、そして感動しながらあっという間に見終わってしまったという印象です。ストーリーとして筋が一本通っている、そういう印象を今思い起こしています。

すぐコーチングの成果があらわれるわけではない、その通りだと思います。それを時間の流れに沿って自然に取り上げながら、ドラマチックなシーンとか、心に残る言葉とかを、ほどよく取り入れ、強弱をきちんと感じさせ、成長記としてまとまっていました。

コーチングキャラバンの意義、システムとか、学校のプロフィール、選手の紹介などが最初にあったので、番組にすんなりと入れたと思います。選手達の個性もきちんと拾い上げながら、個人の成長がチームの成長に結びついていくというところが非常に明確に作られていて、非常にストレートに感動できる成長記になっていたと思います。

大谷コーチは中学３年生で全日本入りしたという名選手で、全日本のエースも張っていらした方です。日の当たるところばかり歩いてきた選手かと思うのですが、一地方の高校のコーチとして来たときに、高いところからではなく同じ目線で底上げしてあげるという表情ですとか、セリフをすくい上げて構成されていて、その人柄が浮き彫り出されていました。

最後にコーチが「代々木以上の宝をもらえた」と言っていました。鬼の目にもという感じで、コーチの目も潤んでいたようです。その表情を捉えたり、セリフを引き出すことができたということは、取材の姿勢がコーチと取材陣との間にも絆が生まれたのではないかなと思いました。

最後の選手達の短いカットのエンディングがとても爽やかで、このチームはもっと良くなるんだろうなという期待を感じさせる終わり方だったと思います。

○佐尾副委員長

どうもありがとうございました。次に、東海林委員、お願いいたします。

○東海林委員

インターネットで知ったのですが、このコーチングキャラバンはフジテレビのネット局がないとコーチを派遣していただけないということなので、青森とか徳島とか山口とか、ネット局がないところは応募もできないんだそうです。ということは、岩手はそのぐらい恵まれているので、もっともっと応募をして欲しいなと思いました。

今回のコーチングキャラバンは、前回と比べて非常に分かりやすく、山場もあり、明快に

１時間の番組に編集されていたなというのはすごく感じました。大阪の人らしくカラッと分かりやすく怒るという部分が岩手の人には欠けているのかなと思います。大阪の方がコーチであるがゆえのメリットというのが非常に番組の中に出ていのではないかと思いました。

ちょっと恥ずかしい話ですが、盛岡の大通のある靴屋さんにインターンシップに出た私のクラスの学生が、ボーッと指示を待っていたので、店長さんが「やる気がないなら帰っていい」と怒りました。そうしましたら「じゃ帰ります」ということで帰ってきてしまったんです。「一緒に謝りに行くから明日行こう」と言ったのですが、「いや、おれはもういいです。おれは一生懸命やりましたからいいです」というような言い方をしました。怒られたときにフンと思うのか、それとも向上心を持って変わりたいと思うのか、この差がその子のこれからの人生に関わっていくことだと思うのです。このバレー部の生徒さんは前向きで、怒られたことをいい経験として、大人になり、お母さんになったときにこの番組のビデオを見て、宝物だと思うことでしょう。

個性的な学生というのが年々減っていまして、みんな同じような当たりさわりのない性格が顔つきに出てきていることを私も感じる時があります。でも番組を通して徐々に、この子はナオちゃんだとか、この子はハナちゃんだというのがだんだん５０分の中で分かってきましたので、怒られながら生徒たちも成長していったんだなと思いました。非常におもしろい、意義のある番組であったと思います。

○佐尾副委員長

ありがとうございました。それでは、久慈委員、お願いいたします。

○久慈委員

私も感動して見させてもらいました。その中で説明があったほうが良かったと思ったのがコートネームです。コートネームは普通どこでも付けるものですか。

○今野ディレクター

これまでの番組を見ましたら女子は付けていました。今回も行ったら付いてたという感じで、恐らく付けるものなのかなと思いました。

〇久慈委員

知りませんでした。普通はこうですとかコートネームの説明があったほうがよかったかなと思いました。

それから、映像の中で叱られた時の涙のアップはよく撮ったな、よく撮れているなと思いました。

あとは、今回私の記憶違いじゃなければ、通常指導している先生が一回も出てきませんでした。これは意図的ですよね。これは出なくて当然良かった。出た瞬間に、あなたの指導が悪いと、生活態度が悪いのはあなたが全部悪いとなりかねないので、あえて出さなくて良かったと思いました。

なかなか叱られることのない子供たちを叱っている番組なので、親として見ていればすごく気持ちが良い。先生がやれないようなところを大谷コーチにやってもらったので、気持ちが良いと思いました。

〇佐尾副委員長

ありがとうございました。

それでは、続きまして欠席委員からのリポートを事務局からお願いいたします。

〇吉田委員レポート

コーチングキャラバンについては過去にも番組で取り上げられましたが、前回よりも見やすい構成になっていたと思います。特に試合の流れが、新人戦、県大会、決勝戦と進み見ているほうにも分かりやすく、ハラハラ、ドキドキの連続でした。

未熟なチームがわずか半年間のコーチングを受けることによって、こんなにも成長するものかと驚きでした。

選手達の顔の表情や大谷コーチの「ゲキ」をとばしている様子、ありのままの姿が描写され、チームの結束力がみるみる高まるのが伝わってきました。合宿所での選手を個別に部屋に呼んで語りかけるコーチと選手の内面的な部分、全てが人生そのものにつながるものと引きつけられて見ておりました。決勝戦で負けたことが、この番組を一層引き立てたように思います。

大谷コーチのはればれした顔がなんとも印象的でありました。改めて、全てのスポーツに通じる指導者の大事さを思い知らされた番組でした。

〇役重委員レポート

議題が「コーチングキャラバン」の番組で、最初「また？」と思いましたが、見ているうちにいつの間にか引きつけられ、見終わった後は胸きゅんの感動が残りました。

こういうスポ根ものを見る時いつも思うのは、選手としての力量と指導者としての力量は、まったく別物であるということ。つまりいい選手がいいコーチになれるとは限らないということ。その点で、今回のコーチは指導者としての才能にも恵まれているなと感じました。ポイントをしぼった叱り方、相手によって揺らがない一貫した怒り方。そしてほめるときは徹底してほめる。「カッコイイ」とほめられた“キョウ”は本当にうれしそうでした。

この指導力は、インタビューの中で「学校の先生になりたかった」のという一言で、分かった気がしました。きっと彼女ならいい先生になったでしょうね。

山場は大船渡高校との決勝戦ですが、点を取られてきた状況で、チームメンバーがコーチを仰ぎ見る目は信頼に満ちていました。コーチもその信頼にこたえ、おそらく心の中では彼女が一番不安であり心配であったと思いますが、それを表には決して出さず、自信に満ちた表情、声で選手たちを励ましていた。これがすごく大事だと思うのです。スポーツに限らない。私たち一般人の仕事、職場でも同じことですが、厳しい状況に追い込まれたときほど、トップは揺らいではいけない。どうしよう、オレ間違ったんじゃないかなんて、内心びくびくしても絶対部下の前ではそんなそぶりを見せてはいけない。リーダーが責任を持ち、自信にあふれて進むべき道を指し示してくれる、その姿勢ひとつで下も頑張れるのですよね。

それがトップとしての重要な資質のひとつと、この番組を見てさらに確信しました。いま、日本の政治家でも何でも、そういう資質が欠けていますね。ちょっとたたかれると、すぐに曲げる。撤回する。熟慮熟考を重ねた上で、いったん決めたことは自分が泥をかぶってでもやり通すというリーダーが減っているような気がします。

話がそれましたが、この番組のよさ、爽やかさは、取材チームがよく現場に張り付き、コーチはもちろん生徒たちとの信頼関係をしっかり築き、丁寧につくりあげたところにあると思います。そうでなければ、カメラの前で素顔になり、涙を流せる子はいない。本気で叱ってくれる人が宝物という、すばらしい言葉を臆せず口にすることもできないでしょう。大変お疲れ様でした。

〇佐尾副委員長

ありがとうございました。私からは、やはり大谷コーチの厳しい指導に対しまして、耐え

て成長していったという姿がよく出ていたということだと思います。キーワードは生徒たちの「決意」で、その決意をさせたコーチ、決意をした生徒、強い自発性と、みんなで目標に向かって進むということがよく映像に表されていたと思いました。

それでは、本日の番組審議会を終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

〇事　務　局

今回の審議会の模様は、４月１９日（土）朝5時１５分から「めんこいテレビ批評」として放送いたします。次回は、５月１４日（水）を予定しております。本日はありがとうございました。